

1 中学校外国語科における教育課程実施上の課題と指導上の留意事項

(1) 国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策

提言1：生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握検証する。

具体的施策：学校は、学習到達目標を CAN-DO リストの形で設定・公表し、達成状況を把握。

① CAN-DO リストとは

外国語表現の能力と外国語理解の能力について、生徒が身に付ける能力を「言語を用いて～することができる」の形で記述した一覧表である。生徒の実態に応じて各学校が作成する。

② CAN-DO リスト作成の意義

- ・生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し、生徒の指導と評価の改善に活用する。
- ・4技能を総合的に育成し、外国語によるコミュニケーション能力、自らの考えを伝える能力や思考力、判断力、表現力を養う指導につなげる。
- ・教員が生徒と目標を共有することにより、言語習得に必要な自律的学習者として主体的に学習する態度を生徒が身に付ける。
- ・学習到達目標を具体的に設定し、指導方法や評価方法の工夫・改善を図る。

③ CAN-DO リストの作成に当たって

- ・生徒の実態を踏まえ、卒業時の学習到達目標を、「言語を用いて～することができる」という形で設定する。
- ・生徒の実態を踏まえ、各学年終了時の学習到達目標を設定する。
- ・学年ごとの学習到達目標を達成するための各単元の目標、学習活動、評価方法等を計画する。

※「各中・高等学校の外国語教育における『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き」より http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1332306.htm

※参照「『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標例及び年間指導計画・単元計画への反映例」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/092/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2013/03/05/1331288_2_1.pdf

(2) 小中高の連携



今後の見通しとして、2020年度の小学校の外国語の教科化、その2年前に当たる2018年度から先行実施されることが、現在有識者会議の中で話し合われている。それともなう、小学校3年生からの外国語活動の開始を含め、これからの外国語教育を見すえた準備をしていく必要がある。中学校の第1学年では、小学校の外国語活動で育成された素地を踏まえた指導が求められる。

高等学校は、「授業を英語で行うことを基本とすること」となっている。この言葉の趣旨は、教師が英語を用いて授業を進めることはもちろん、言語活動を充実させて生徒に英語を使用させる機会を増やすことを指している。これに耐えうる生徒を育成するため、言語活動を通じた定着を図る授業を展開することが求められる。

小学校の教科化の流れ、高等学校の英語による授業という変化の中で、中学校の担う役割は大きく、小学校での学びを活かし、高等学校での学びにつなげることを意識した指導が求められる。各発達段階のねらいを把握し、生徒の学びを高めるためには、授業内容を正しく理解し、継続性と発展性のある指導を行うことが重要である。そのために**校種間の連携が必要**である。

中学校 外国語

2 中学校での授業改善に向けて

キーワード：発信，4技能の総合的な育成，4技能の統合した言語活動

(1) 「発信」(コミュニケーションのとらえ)

全国的にみると、昨今の入試問題の傾向として、Open end (自分の意見や、考えを書く) 等の自由記述問題が増えている。これからは特に「発信」する力の育成が求められる。具体的には、自分の考えや気持ちなどを相手に伝える活動を授業に取り入れていくことが必要である。単に言語材料の理解や教科書の読み取りにとどまるのではなく、場面や状況、背景、相手の表情や反応など実際の言語の使用場面を踏まえた活動の中で、自分が伝えたいことを適切に伝えることができる生徒の育成を目指す。

(2) 4技能の総合的な育成(バランス)

聞くことや話すことなどの音声重視から、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどをバランスよく育成することが求められている。毎時間4技能を総合的に育成する必要はなく、3年間を見通して、偏ることなく、バランス良く育成することを目指していただきたい。それに当たっては、生徒にどのような力を付けさせたいのかを明確にし、計画的に育成する単元構想力を高めること、創意工夫を凝らした言語活動を展開することが教師に求められる。

(3) 4技能の統合した言語活動(関連付け)

4技能を一つ一つ取り上げるのではなく、統合した活動を取り入れ、言語活動のさらなる充実を図る。「4技能を統合した言語活動」とは、例えば E-mail を読み(読み)、内容を他者に伝え相談し(話す、聞く)、返信する(書く)といった活動である。

コミュニケーションの支えである文法は、言語活動を通して、活用することで定着を図る授業の展開を目指す。

(4) 課題と考えられること

1) 真の「コミュニケーション」

外国語で行う「コミュニケーション」でも母語で行う「コミュニケーション」と同じである。自分と相手の間に素早い応答が必要であり、その場で考えながら表現することが求められる。授業の中で、読み原稿を準備させて発表させることがあるが、実際に日常で準備したものを話す機会はそれほどない。生徒に活動させる場面においては、準備をさせすぎないこと、準備させたものを読むだけの活動にならないことに注意する必要がある。

2) 教科書の活用

教科書を教えるのではなく、教科書で教える授業づくりを意識しなければならない。教科書からの受信に止まることなく、主体的にかかわる、読むことや書くことをコミュニケーションに生かす工夫を図ることが求められる。

3) ゴールの設定

言語材料を理解することがゴールとならないよう、再度確認し授業改善を図る。中学校外国語科における評価方法等の工夫のための参考資料を参照。

http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/11_sho_gaikatu.pdf

3 その他

(1) 国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策

提言4：英語教員の英語力・指導力の強化や学校・地域における戦略的な英語教育改善を図る。

英語教員の英語力向上のため、各試験団体による一定期間の特別受験制度が提供されている。

実施団体：実用英語技能検定1級及び準1級、ケンブリッジ英検、TOEFL(iBT)、

TOEIC 公開テスト、GTEC CTE 等